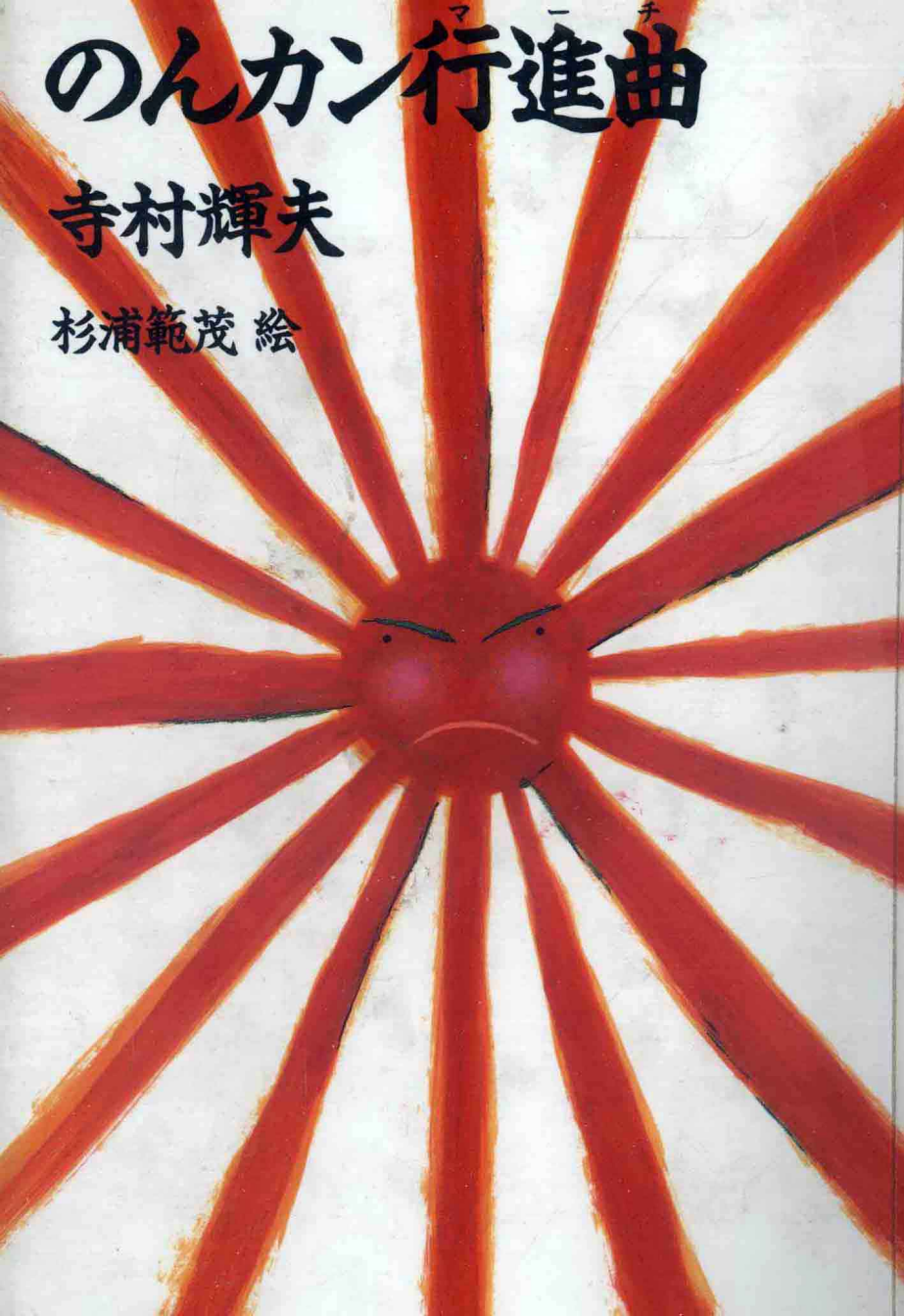


のんカン行進曲

寺村輝夫

杉浦範茂 絵



のんカン^マ行^ー進^チ曲

寺村輝夫

杉浦範茂 絵

理論社

著者紹介

1928年東京に生まれる。戦後、早稲田大学専門部政治経済科在学中より早大童話会で童話の創作を始める。1961年処女出版の「ぼくは王さま」(理論社)で毎日出版文化賞を受賞。現在、文京女子短期大学教授。作品に「ぼくは王さま全集」全10巻「ぼくは王さま全1冊」「ちいさな王さまシリーズ」既6巻(理論社)「寺村輝夫のむかしばなし」全15巻(あかね書房)「アフリカのシュバイツァー」(童心社)「王さまの料理読本」(みずうみ書房)「寺村輝夫童話全集」全20巻(ポプラ社)などがある。
住所 = 東京都田無市南町4-20-13

地平線ブックス

のんカン行進曲^{マチ}

一九八七年十二月 初版
一九八七年十二月 第一刷

著者 / 寺村輝夫^{てらむらお}

画家 / 杉浦範茂

制作 / 小宮山量平

発行 / 山村光司

発行所 / 株式会社理論社

東京都新宿区若松町一五-六

電話 (03) 二〇三-五七九一

郵便番号 一六二一

振替 東京九一九五七三六

乱丁・落丁本はお取替えます。
印刷・加藤文明社

ISBN4-652-01622-0

©Teruo Teramura, Hammo Sugiura 1987 Printed in Japan

の
ん
カ
ン
行^マ
進^イ
曲^チ

目
次

1 いざゆけのんカン

5

2 おれはスパイじゃない

52

3 守るも攻^せめるも鉄^{てつ}の

112

4 教え子を殺したくない

169

5 軍艦旗・水中花

215

6 克ク忠ニ克ク孝ニ

275

7 お国のためだがまんしろ

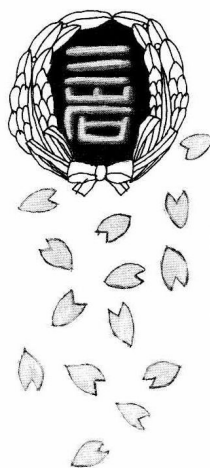
324

あとがき

384

装幀 平野甲賀

1 いざゆけのんカン



コミヤ・カンロクは、小学校の一年生になった。
昭和十年（一九三五）四月。

入学式を前にして、桜の花が散りはじめていた。
母は、カンロクが幼稚園のころから、

「うちの前の桜が咲いたら、学校に아가るんだよ」

といっていた。家の前の道路は、桜並木になっている。カンロクの家の門柱のわきにも、桜の若木が立っていた。

カンロクは、毎日、つぼみが赤くふくれるのを待った。やがて花が咲きだし、満開になったが、入学式はこなかった。

「学校の桜は、まだ咲いてないのかな」

カンロクは、すぐ近くにある小学校にいつてみた。へいにそつて、桜の枝が見える。その桜も、もう咲きそろつていた。裏門のすきまからのぞくと、校庭いっぱい、花びらが舞つていた。

「ちえつ、お母ちゃんの、うそつき！」

その母が、入学式の前の日、とつぜんいいだした。

「あした、お母ちゃんは入学式にいかないよ。かわりに、アリガさんのおばさんに、たのんだからね」

入学式のつきそいに、きてくれないという。

「なんでだよ。幼稚園の卒業式だつて、だれもこなかったの、ぼくだけだったぜ」

「だつてさ、こんなおなかだもん」

母は、大きなおなかをさすつた。まるで相撲とりの〈玉錦〉みたいだった。おなかに赤ちゃんがいたのだ。

「もし、入学式のさいちゆうに生まれたら、どうするのさ」

「生まれそうになったら、かえつてもいいよ」

「そうはいかない」

母は、それまでに、七人もの子どもを生んだ。カンロクは、六ばんめの子だ。いま、八人めの子どもをおなかにいれて、朝から晩まで、ひとりで家の中をきりまわしている。洗濯もするし、掃除から買ひもの、食事のしたくも針仕事も、よその母親とすこしもかわりなくやっている。それなのに、なぜ入学式に来てくれないのだろう。

「どうせ、ぼくだけかわいくないんだ」

カンロクは、あくたいをついて、ふくれた。

入学式の朝、父が会社にでかけるのと入れかわりに、アリガさんのおばさんがやってきた。

「おめでとう、カンちゃん。へえ、いい帽子だね。校章が光ってるよ」

といって、カンロクの頭に、帽子をかぶせてくれた。もつとも、帽子だけが新品で、服から靴下まで、みな兄のおふるだった。兄弟の多いうちは、兄からのおさがりを着るのがあたりまえだった。アリガさんは、母にいった。

「いいね、子どもって。うらやましいよ、あたしゃあ」

アリガさんは、父の会社の同僚の奥さんだった。アリガさんには子どもがない。そのせいもあって、カンロクを、わが子のようにかわいがってくれた。

「カンちゃんを、養子にくれないかね」

と、まじめにいった。カンロクの上も下も、みんな男兄弟だった。ひとりぐらい、養子にくれてもいいじゃないの、という。

母は、

「またはじまった。じょうだんはよして、入学式にいつてきてよ」

といって、二人を送りだした。

カンロクは、アリガさんがきらいではなかった。が、気になることがある。それは、このおばさん、あめ玉を、ガリバキとかみくだいて食べるクセがあるのだ。歯がいいのか、気がみじかいのか、これがどうにも気にかかる。ときには、山婆が人骨をかみくだいているようにも思えて、

恐ろしかった。カンロクはいった。

「いつとくけどね。ばく、おばさんちの子にならないよ」

学校がはじまった。

一年三組、コミヤ・カンロク——。先生はフジタ先生といって、鼻の下にちよびひげをはやし、やせがたのノッポ先生だった。

ランドセルも兄のおさがりだったが、教科書はちがった。前の年から、国定教科書が変って、兄たちで見なれた灰色のくらしい表紙ではなく、うすい赤茶の明るいものだった。尋常小学国語読本巻一。

フジタ先生が、ま新しい教科書の第一ページをひらかせて、

「サイタ

サイタ

サクラガ

サイタ」

と読みあげる。

きいたとたんに、カンロクは声をあげた。

「先生、桜なんて、咲いてません！」

自分ではいうつもりはなかったが、かつてに声が出てしまったのだ。

これには、フジタ先生もおどろいた。目をハトのようにまるくして、カンロクを見た。しばらくは口もひらかなかった。クラスのみんなも、カンロクのいったことが、すぐにはのみこめず、

笑うものもなかった。

ただ一人、ミヤグチ・トシミツという子が、小さく、

「ばあか」

といっただけだった。カンロクは、三列ぐらいうしろの、トシミツを見た。りこうそうな子だった。カンロクと目が合うと、ふん、とまるい鼻をうごめかせて、笑った。いかにも、ばかにしたような目つきだった。

フジタ先生は、おだやかにいった。

「おもしろいこと、いうな。うん。だが、教科書の中では、咲いているだろ。それでいいんだ。

桜は、日本の花。日本のほこりだ。日本人の、心なんです。今は、それをべんきょうする。外のけしきは、かんけいなし」

もちろん、カンロクには、よくわからない。教科書の中で「サクラガ サイト」のなら、校庭の桜も咲いていなくてはならない。

——ちえっ、べんきょうなんて、つまんねえの——

心の中でだけ、はきすてるように、つぶやいた。

カンロクは、べんきょううって何をする事なのか、よくわからなくなった。算術さんじゆつの時間など、ばかりしくなってくる。

「ここにアヒルが二わいて、こっちから五わやってきた、みんなで何ばになりましたか」
考えることはない。七わにきまっている。

それなのに、あのミヤグチ・トシミツは、まじめになって手をあげて、

「はい、七わになりました」

なんてこたえている。先生に聞かれると、きまって一ばん先に手をあげる。答えがまちがっためしがない。

「やなやつだな」

こんなやつとは、いっしょに遊ぶのもいやになった。

いやなことばかりでもない。読方（よみかた）（国語）の教科書にこんなページがあった。

「ススメ

ススメ

ヘイタイ

ススメ」

このページには、勇ましい兵隊（へいたい）さんが、鉄砲（てつぱう）をかついで行進している絵がついていた。カンロクは、家にかえると、座敷（ざしき）ぼうきをかついで、「ススメ ススメ」と、部屋（へや）じゆうを歩きまわった。母は、

「いいかげんにしなつ。ほこりがとぶよ」

といって叱（しか）った。が、カンロクは、先生にいわれたことを思いだして、口ごたえした。

「ヘイタイさんは、お国のために、つくすんだぞ。えらいんだぞ」

そういつて、ドタドタ歩くことをやめなかった。

東京市第三岩淵尋常小学校——。

カンロクの学校の正しいよびかただった。が、人々はみな「三岩^{さんいいわ}」といていた。

「わが三岩は、王子区^{おうじく}でも一ばん新しい学校で、一ばんりっぱな小学校です」

校長先生がいった。

春の遠足になった。

はじめての遠足だ。カンロクは、遠足と聞いただけで興奮^{こうふん}した。

「遠足だ、遠足だ、うれしいな」

とはしゃいでいると、四年生のマサキ兄は、

「ふん、一年生なんて、どうせ歩きで善光寺^{ぜんこうじ}だろ。おもしろくもねえ」

といってひやかす。

善光寺というのは、荒川大橋^{あらかわおほはし}を渡^{わた}ったむこう岸にある。そこはもう、埼玉^{さいたま}県^{けん}だった。

王子区は、東京の北のはずれで、荒川を境^{さかい}に、埼玉県になる。東京のいなかみtainところだった。

フジタ先生は、遠足の前の日、カンロクたちにいった。

「学校の遠足は、幼稚園^{ちよういえん}とちがって、おべんきょうの一つです。いいですね」

といって、黒板に地図を書いて説明した。

「きみたちも知っているが、三岩は、稲付^{いねつけ}の山の上にあります。だから、学校を出発すると、すぐに坂道を下ります。歩いていくと、赤羽^{あかばね}駅^{えき}に出ますね。三岩から赤羽駅^{あかばねえき}に行くには、どの道を通っても、みな坂道を下っていくことになります」

カンロクは、またまた先生はわかりきったことをいうと思った。が、次の説明を聞いて、気持

ちがかわった。

「赤羽駅からはもう、ずっと平らな道です。しばらく行くと、荒川に出ます。大きな川です。荒川の新たな橋を渡ると、善光寺はすぐですね。さて、この荒川。むかしは、大雨がふると、すぐに氾濫したものです。あふれちゃうんですね。あふれた水は、今駅のあるところをこえて、私たちの稲付の台地の下までやってきます。さすがに、山の上はだいじょうぶ。だが、田んぼの稲はたまりません。水のいきおいで抜かれた稲が、この台地の下に流れ付きます。稲が付く。——それで、このあたりを『稲付』というようになったんだそうです」

わかった。稲付というわけが。

東京市王子区稲付、西町三丁目七番地。カンロクの家住所だ。小学校に上る前に、何とも覚えさせられたから忘れられない。イネツケ——。なるほど。

カンロクは、りこうになった気がした。が、そのとき、ミヤグチ・トシミツが質問したのだ。「なぜ学校の名は『岩渕』なんですか。稲付第三小学校じゃないんですか？」

そうか。うん、おかしい。でも、気にいらぬい。カンロクがおかしいと思わなかったことを聞くな。あいつ、よほど頭がいいのかな——。

フジタ先生は、

「岩渕町というのは、すこし前まで、赤羽駅を中心としたこのあたり、ぜんぶの町の名まえだったのです。三岩のあるところは、東京府北豊島郡岩渕村稲付村字梅ノ木——といいました。それが、東京市に加えられて、王子区稲付、になったんです」

カンロクは、びっくりした。フジタ先生のことばに「梅ノ木」という名前があったことだっ

た。

こんどは、カンロクが質問する番だ。

「先生、ウメノキ、つて、ぼくがいる『梅ノ木莊うめぎ』のことですか？」

カンロクの住んでいる住宅地ちやうぢちの名前を、梅ノ木莊、といった。父は、よく自慢じまんしていた。

「手紙の住所は、わざわざ稲付西町なんて書かなくても、王子区梅ノ木莊21、と書けばつくんだ。ここは、特別なんだよ」

フジタ先生はいった。

「そう。むかしの字あざなの名をとつて、梅ノ木莊としたんだね。今でこそ、あんなりっぱな家がならんでいるが、三岩のあたりは、むかし、畑でラツキヨラツキョーをつくっていたらしい」

だれかが、

「きえつ、ラツキヨ？」

「くせえ、おれ、大きらい」

といった。みんな大笑おほわらいになった。

「ラツキヨ―畑だったものが、こんな町になったのには、わけがあります。きみたちは十二年前、関東大震災かんとうだいしんさいがあつたことを聞いているでしょう。東京から横浜にかけて大地震だいじしんがおこり、焼け野原になってしまった。焼け出された人たちの住むところとして、それまで畑だったところに、どんな家が建つたんです。梅ノ木莊もその一つ。あそこは、どちらかといえば、お金持ちの人たちのために、とくに建てた住宅地なんです」

学校というところは、カンロクの知らないことを、何でも教えてくれるところだ。

——梅ノ木莊うめきそうって、やつぱり、お父ちゃんがいってたように、特別のところなんだな。それで、そこだけ、道路に桜さくらの木を植えてあるんだ——

梅ノ木莊住宅ちやうたくには七〇軒ぐらいの家がある。が、同じ組には、ウスダ・ヤスオがいるだけだ。そういえば、カンロクの出たサザナミ幼稚園ちひなみの卒業生二十五人のうち、半分が梅ノ木莊に住んでいた。幼稚園に行くのは、たいがいお金持ちの子だった。

ところが、その日の帰り、ミヤグチ・トシミツにつかまった。

「へえ、コミヤ。梅ノ木莊かよ、おまえの家」

というのだ。トシミツは、ひたいの広い子で、ほほが赤くふくれて、鼻がひくくまるかった。しかし目がするどかった。その目でにらまれると、あまり気持ちがよくなかった。氣おされてしまったのだ。

「梅ノ木莊なら、もっと、ちゃんとしたかつこうしろよな」

という。

たしかに、ふつうなら「お坊っちゃん」であるはずのカンロクは、どう見ても、それらしくなかった。

洋服は、兄のおさがりだった。四つついてあるボタンは、みなちがつていた。そのボタンが、やつとはめられるくらい、カンロクはふとっていた。その上、いつも、二番目のボタンがはずれている。はめたつもりなのだが、そこだけボタンが小さいので、はずれてしまうのだ。

トシミツは、しつこくからんでくる。

「おい、くつした、ちゃんと上げておけよな。だらしないぞ」